

京都大学医学部附属病院リハビリテーション科 池口良輔先生

手術後の「その先」を支えるリハビリテーション医療

「手術は1, 2時間で終わりますが、患者さんの生活の質 (QOL) を本当に向上させるのは、その後のリハビリテーション治療です。」と語るのは、2024年5月に京都大学医学部附属病院リハビリテーション科の初代教授に就任した池口良輔先生です。池口先生は、手外科やマイクロサージャリーを専門とし、整形外科医としてのキャリアを積み重ね、リハビリテーション医療の重要性を深く実感してきました。「手術後だけでなく、幅広い疾患に対して、作業療法士や理学療法士、言語聴覚士の皆さんと連携し、患者さん一人ひとりに最適な治療を提供することが、私たちリハビリテーション科医の使命です。」と池口先生は語られます。

リハビリテーション科の挑戦と可能性

京都大学医学部附属病院リハビリテーション科では、1日400件近くのリハビリテーション治療が行われています。整形外科や脳神経外科、血液内科など、さまざまな診療科からの依頼に応じ、患者さんの機能回復を支援しています。特に、がん治療や移植医療の分野では、治療前後の患者さんのコンディションを整えるためにリハビリテーション治療が欠かせません。「リハビリテーション医療は、患者さんの身体的な回復だけでなく、社会復帰やQOLの向上を目指す点で、非常にやりがいのある分野です。当科には、医師4人、理学療法士24人、作業療法士8人、言語聴覚士6人が所属しており、日々の臨床活動で蓄積した知見やデータを活用した研究活動にも熱心に取り組んでいます。」と池口先生は語られます。

再生医療とリハビリテーション医学の融合

池口先生は、リハビリテーション医学の中でも特に再生医療に注力しています。バイオ3Dプリンタを用いた三次元神経導管の作製と移植に関する研究では、末梢神経損傷の治療において有効性と安全性を確認する成果をあげています。「リハビリテーション医学は、単なる機能回復のための治療にとどまりません。再生医療や先端技術を取り入れることで、これまで治療が難しかった疾患にも新たな可能性を開くことができます。」と池口先生は語られます。

若手医師へのメッセージ

池口先生は、リハビリテーション医学の未来を担う若



池口良輔 (いけぐち・りょうすけ) 教授

2024年5月より京都大学医学部附属病院リハビリテーション科の初代教授に就任。大阪府堺市出身。幼少期から高校まではサッカー部。1993年京都大学医学部卒業後、整形外科に入局し、手外科、マイクロサージャリー、外傷外科を専門として経験を積み、2014年より京都大学医学部附属病院リハビリテーション科准教授として、リハビリテーション医学、再生医学、手外科、マイクロサージャリー、外傷、同種移植、神経再生など、多岐にわたる研究と診療に従事する。

手医師の育成にも力を注いでいます。「リハビリテーション科は、人生を取り戻すために患者さんに寄り添う科です。救急疾患から難病まで、幅広い分野で活躍できる可能性があります。」と語る池口先生。京都大学医学部附属病院では、急性期から回復期、維持期まで、バランスのとれた研修プログラムを提供しています。「リハビリテーション医学は、医師としての幅を広げるだけでなく、患者さんの人生に深く関わることができる素晴らしい分野です。ぜひ一緒に、この分野を盛り上げていきましょう。」と池口先生は若手医師にエールを送られます。

リハビリテーション医学の未来を共に創る

池口先生の目標は、リハビリテーション科をさらに拡大し、優秀な人材を育成することです。「年に1人でも2人でも、医局員を増やし、組織を強化していきたい。」と語る池口先生の言葉には、リハビリテーション医学への情熱と未来への希望が込められています。池口先生のもとで、この分野に挑戦する若手医師が増えることを期待しています。(文責 広報委員会)